ホリシャカバマダラの再発見

付 村山修一・下野谷豊一両氏記載の新種及び新亜種に対する疑問

黒沢良彦
東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館動物研究部

The true status of *Salatura yuchingkini* MURAYAMA & SHIMONOYA, with comments on some forms described by the same authors

YOSHIHIKO KUROSAWA

村山修一，下野谷豊一両氏は本誌13巻3号（1962）誌上に，スジグロカバマダラ *Salatura genutia* CRAMER ともカバマダラ *Panlymnas chrysippus* LINNÉ ともつかない奇妙な種類，ホリシャカバマダラ *Salatura yuchingkini* を新種として記載した．これは下野谷氏所蔵の台湾埔里産の1♂に基くものであるが，その後絶えて本種に言及した記事を見たことがない．ところが，本種の模式標本が採れた1960年9月28日よりも遙か以前の1924年5月27日に，八重山群島の石垣島で，本種と全く同様の標本が採れていたので，その標本について報告すると共に，本種と両氏が記載した数種の蝶について私の抱いている疑点について触れてみたい．

標本は下記の通りである．

1♂，沖縄県八重山郡石垣島，27. v. 1924.

国立科学博物館に所蔵される故鹿野忠雄氏蒐集品のうち未整理の紙包み標本中から発見したもので，採集者は不明であるが，三角紙に記された日付の書体から推定すると恐らくは鹿野忠雄氏自身ではないかと考えられる．

この標本を下野谷氏所蔵の *yuchingkini* の完模式標本の写真と比較しても全く差異がなく，原記載の中で村山，下野谷両氏が指摘された通り，この2頭の標本に関する限り，本種はカバマダラとスジグロカバマダラ両種の中間的特徴を持っているが，どちらかといえばむしろ後者に近い外観をしている．即ち，前翅の白帯の状態や後翅外縁の黒色部の幅などはカバマダラに似ているが，前後翅共に翅脈が黒条になる（但し，スジグロカバマダラより明らかに細い）点や後翅中室に黒斑がない点，さらに，後翅の裏面外縁に2重の白斑列が並ぶことなどはスジグロカバマダラに近い．従って，一見した感じはスジグロカバマダラの個体変異とも見誤る程である．私は交尾器は検していないが，原記載にある図から判断すると，交尾器も両者の特徴を兼ね具えているよう
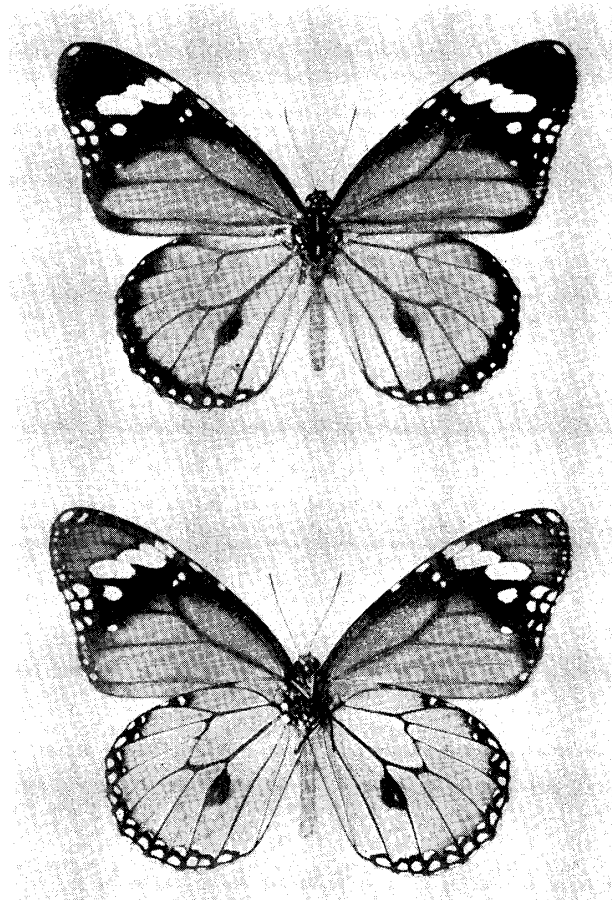
Fig. 1. *Salatura yuchingkini* MARUYAMA & SHIMONOYA (A hybrid between *Panlymas chrysippus* L. and *Salatura genutia* CR.)

である．なお，模式標本も今回の標本も共に雄である点に注意すべきであろう．

村山，下野谷両氏は本種をスジグロカバマダラ属 *Salatura* MOORE, 1880 の独立種として記載したが，(1) 色彩，斑紋がカバマダラ *Panlymnas chrysippus* LINNÉ とスジグロカバマダラ *Salatura genutia* CRAMER との中間である；(2) 恐らくは雄交尾器も同様；(3) マダラチョウ科の種類はどの種類も産地では普通種で，多くの場合群飛し，個体数は多いのに，本種のようにかなりの大型種でありながら数年ないし十数年に一度採集されるだけの稀な種類が存在するとはとても考えられない；(4) 現在までに本種が発見されている埔里及び石垣島は共にスジグロカバマダラ，カバマダラ両種はどちらも普通に産する；以上の4点からホリシャカバマダラ *Salautra yuching-kini* MURAYAMA & SHIMONOYA, 1962 は決して独立した種類ではなく，間違いなくカバマダラ *Panlymnas chrysippus* (LINNÉ, 1758) とスジグロカバマダラ *Salatura genutia* (CRAMER, 1779) の種間雑種であろうと私は考えている，この場合恐らくはスジグロカバマダラ♀×カバマダラ♂の組合せではなかろうかと推定しているが，確証があるわけではない．

以上のようにカバマダラとスジグロカバマダラとは野外で雑種が出来る程近縁であるので，前者の属する属 *Panlymnas* BRYK, 1937 と後者の属する属 *Salatura* MOORE, 1880 は共にそれぞれ異った独立属とする必要はないような気がする，この場合後者の方が創設年代が古く先行するが，新大陸に産するオオカバマダラ属 *Danaus* KLUK, 1802 との関係もあり，私としては *Danaus* 属を用い，必要とあらば各々を亜属とする方がよいのではないかと考えている．

村山，下野谷両氏が記載されたホリシャカバマダラについての私の意見は上記の通りであるが，両氏はこの他にも私には納得のいかない幾つかの新種や新亜種を記載しているので，この機会にこれらのものについての私の考えを記してみたい．

本誌11巻4号 (1960) 誌上で両氏はガランピマダラ *Euploea core garampiana* MURAYAMA & SHIMONOYA を記載し，台湾ガランピ岬産の1♂を完模式標本に指定したが，13巻3号 (1962) 誌上で種名を *E. godartii garampiana* MURAYAMA & SHIMONOYA と変更し，1♀を副模式標本に指定した．しかし，その変更の理由を読んでみると，現在一般に受け入れられている最新の考え方に逆行して，*Euploea* 属を斑紋や色彩だけによって分類する SEITZ 時代の旧い分類法にもどった様な感じを与える．

現在の考えでは種 *core* (CRAMER, 1780) はインド，セイロンからオーストラリアに至る広い範囲に分布し，極めて多くの亜種があり，その亜種の多くは，SEITZ の時代にはそれぞれ独立種と考えられていたもので，斑紋は千差万別，これが同一種かと思う程異っている．また，どの地方でも最普通種の一つで，同一地域に棲む他のムラサキマダラ属 *Euploea* FABRICIUS, 1807 の種類の斑紋を大部分本種の斑紋と同一傾向を持ったものに統一してしまっている．従って，*godartii* LUCAS, 1853 も明らかに *core* (CRAMER, 1780) のインドシナ半島地域の亜種で，かつ同地では最も普通な種類である．*core* の他の地域変化の例から見て，もし，本種が台湾に以前から土着して棲息していたと考えるならば，当然台湾の他のムラサキマダラ属の種類と同一傾向の斑紋をしていなければならない．然るに，台湾で採れた *core* がインドシナ半島地域のものと同一傾向の斑紋をしていて，その上，極めて稀でわずかに雌雄各一頭しか採集されていないのは，台湾で発見された本種が，季節風か台風か目下の所明らかではないが，風によってインドシナ半島，それも中南部から運ばれて来たものであることを示している．事実，写真に示された台湾産と称する雌雄はインドシナ半島の *E. core godartii* LUCAS, 1853 から区別する特徴は全く見当らない．両氏が挙げた *garampiana* を *godartii* から区別する特徴は全部個体変異であり，完模式標本で挙げられた小型という特徴も副模式標本では普通以上の大きさになり，如何に一頭だけによる区別がその種（亜種）の変化に精通しない者が区別した時には不安定なものであるかを如実に示している．沖縄本島から本亜種 *godartii* が迷蝶として記録された（本誌13巻3号，1962）ことも台湾で採れたものがインドシナ起源のものであることを裏付けるものであろう．

両氏は本誌13巻4号 (1962) 誌上でタイワンヤマキチョウ *Gonepteryx amintha* (BLANCHARD, 1871) の新亜種 *meiyuanus* MURAYAMA & SHIMONOYA を記載した．これは台湾眉原産の1♂に基づくもので，原記載にもはっきりとタイワンヤマキチョウ *G. amintha formosana* FRUHSTORFER, 1908 とタイワンコヤマキチョウ *G. mahaguru taiwana* PARAVICINI, 1913 との中間の特色を具えると記してある．この亜種の原産地眉原は台湾

省南投県眉原で，埔里北方の北港渓沿いの山地にあり，付近一帯はタイワンヤマキチョウとタイワンコヤマキチョウ両種の産地である．従って両種の自然雑交による種間雑種が現れても不思議はない．しかるに．村山，下野谷両氏は両種の中間の形質を具えたものをタイワンヤマキチョウの新亜種として記載した．我々の知見では，同一地方に同一種内の2亜種を産することはあり得ない．両氏の新亜種を認めると，同じ眉原地方にタイワンヤマキチョウ *G. amintha* (Blanchard, 1871) の2亜種 *formosana* と *meiyuanus* を産することになり，上記の考えに矛盾する．従って，*meiyuanus* は両氏も記された通り，間違いなくタイワンヤマキチョウとタイワンコヤマキチョウとの種間雑種であると私は考える．またヤマキチョウ属 *Gonepteryx* Leach, 1815 は明らかに女性形である．一方 *meiyuanus* は明らかに男性形である．従って，*meiyuanus* は，上記の理由で今後は用いる必要はないであろうが，当然，属名の性に合せた語尾，*meiyuana* にしなければならない．この様なことは，我々命名をする者にとっては常識である．

先にも記した通り，両氏はカバマダラとスジグロカバマダラとの種間雑種と考えられるものを独立種として記載しながら，タイワンヤマキチョウとタイワンコヤマキチョウの種間雑種と考えられるものはタイワンヤマキチョウの亜種として記載している．同じ種間雑種と考えられるものを一方では独立種としながら，他方では亜種，それも同一産地に棲息する種類の亜種としたのは一体如何なる理由によるものであろうか，私には理解出来ない．

両氏はやはり本誌18巻4号誌上で，台湾産のイワサキコノハ *Doleschallia bisaltide* (Cramer, 1777) を新亜種 *koshunensis* Murayama & Shimonoya として区別した．しかし，台湾で採れた本種は後にも先にも完模式標本となった恒春産の1♂だけで，しかも，両氏の挙げた本亜種の特徴はいずれもフィリピン産の亜種 *philippensis* Fruhstorfer, 1899 の個体変異の中に含まれ，これから区別される充分な特徴を持っていない．掲載された写真から推定すると，この標本は，各地のイワサキコノハの中に亜種に関係なく現れる，裏面基半分が著しく暗色を帯びる型 f. *basalis* Fruhstorfer, 1927 に当るように思える．両氏が比較に用いた八重山諸島産の亜種 *iwasakii* Matsumura, 1929 は，私が既に1956年に「自然科学と博物館」23巻1～2号誌上で述べた通り，フィリピンの亜種 *philippensis* Fruhstorfer と同一亜種で，フィリピンから風によって飛来するもので八重山諸島に土着のものではない．台湾で採れた標本も同様にフィリピンから飛来したものであろう．

村山修一氏は本誌21巻3～4号 (1970) 誌上で，石垣島川平で同氏自身採集の1♀に基づいてイシガキシロチョウ *Appias celestina kabiraensis* Murayama を新亜種として記載した．一方，下野谷豊一，余　清金両氏は本誌22巻1～2号 (1971) 誌上で，台湾からこのイシガキシロチョウを記録すると共に，その学名はフィリピンから知られる *A. maria* Semper, 1875 に他ならないことを記し，台湾のものも石垣島のものもフィリピンからの迷蝶であろうと述べている．

Appias celestina (Boisduval, 1832) はニューギニアとその付近の島々に分布する種類で，雄は表面が鉛青色を呈し，東洋熱帯に広く分布し台湾にも産するベニシロチョウ *A. nero* (Fabricius, 1793) のニューギニア地区における代置種と考えられている．従って，ベニシロチョウを産するフィリピンや台湾を跳び越して，石垣島に *celestina* の別亜種を産するなどということは常識では到底考えられない．ましてや，雌一頭だけでその亜種を記載する様な離れ技は我々には至難技であろう．本種は下野谷氏が指摘した通り，やはり学名を *A. maria maria* Semper, 1875 (ルゾン島産) とする方が妥当であろう．

本種に限らず，上記のガランピマダラやイワサキコノハの例の様に，村山，下野谷両氏が新亜種としたものの中には，元来その地方に棲息する種類ではなく，いわゆる迷蝶として他地方から飛来したと考えられる種類が少なくない．我国でこそこの様な種類は特定地域に飛来する特定な種類に限られているが，熱帯地方ではこの様な例は比較的多く，場合によっては在来亜種と雑交する場合もあり，飛来地で数年間発生を続ける場合も考えられるが，原産地のものと異る新しい亜種になるとは到底考えられない．従って，台湾や琉球列島では毎年または数年に一度フィリピンから飛来するのに，フィリピンとは異った亜種になっているなどということはとてもあり得ない．ましてやフィリピンから飛来するのに，フィリピン，台湾，琉球列島それぞれが別亜種なんていうことはナンセンスである．村山，下野谷両氏の命名を読んでみると，故松村松年博士が片端から命名された時代から一歩も出てない様な気がする．両氏にとって新しいものは全部新名を付す必要があるとでも考えておられるのであろうか．「……Murayama & Shimonoya」が増えるので両氏は満足であるかも知れないが，我々には迷惑である．

Summary

In the present paper, the author reported the rediscovery of *Salatura yuchingkini* MURAYAMA & SHIMONOYA, 1960, from Ishigaki-jima of the Loo-choos. In the present author's view, this curious butterfly should be regarded as a hybrid between *Panlymnas chrysippus* L. and *Salatura genutia* CR. In the same way, *Gonepteryx amintha meiyuanus* MURAYAMA & SHIMONOYA, 1962, described from Meiyu, central Formosa, may be a hybrid between *G. a. formosana* FRUHSTORFER and *G. mahaguru taiwana* PARAVICINI.

Euploea godartii garampiana MURAYAMA & SHIMONOYA, 1960, described from southern Formosa is nothing but a migrant of *E. core godartii* LUCAS, which is a common species in southern Indochina and Thailand. *Doleschallia bisaltide koshunensis* MURAYAMA & SHIMONOYA, 1962, is also none but an example of *D. b. philippensis* FRUHSTORFER migrated from the Philippines to Formosa. Moreover, *Appias celestina kabiraensis* MURAYAMA, 1970, described from Ishigaki-jima of the Loo-choos is a migrant of *A. marina* SEMPER from the Philippines, as was already pointed out by T. SHIMONOYA in 1971.

小笠原からのムモンウスキチョウの発見

白　水　　隆

福岡市中央区六本松4丁目　九大教養部生物学教室

これまで小笠原からムモンウスキチョウ *Catopsilia crocale* CRAMER の記録はない．1972年8月に瀬戸屋耕二君（九大農学部学生）に小笠原の昆虫採集を依頼したが，その採集品の中にムモンウスキチョウの 2♂♂ が含まれていたので記録しておく．同君によれば採集した 2♂♂ 以外にも相当数の飛翔が見られたという．

1♂, Omura～Mt. Chuô, Chichijima, 11. viii. 1972, K. SETOYA leg.

1♂, Ogiura, Chichijima, 16. viii. 1972, K. SETOYA leg.

末筆ながら，小笠原の昆虫採集について便宜を与えて頂いた東京都立大学の岡田豊日教授，採集に努力された瀬戸屋耕二君に深謝する．
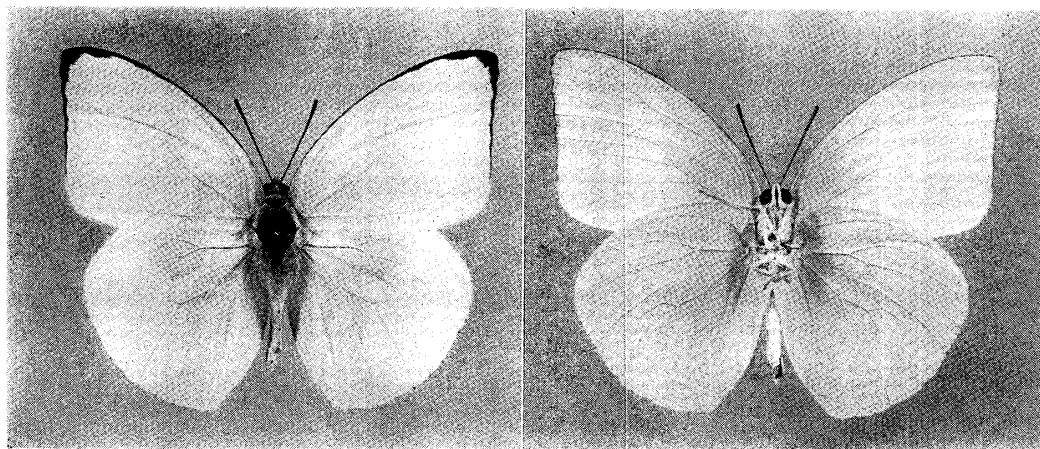
Fig. 1. *Catopsilia crocale* CRAMER ♂ (父島, 11. viii. 1972)